

## ■ 解答・解説

問1 春の段では、心情を表す言葉を使わず、「白くなりゆく山ぎは」「紫だちたる雲のほそくたなびきたる」というように、移りゆく空の色や雲のようすといった**情景描写**だけを並べています。さらに文末を連体形で止めて余韻を残すことで、説明せずとも読み手が自分でその美しさを感じ取れるようにしています。「美しい」と言わずに美しさを見せる描き方です。

問2 現代仮名遣い…「ようよう」／意味…「だんだん・しだいに」。

「やうやう (yau yau)」のように「au」の音は、現代仮名遣いでは「ô (オー)」と読むので「ようよう」になります。夜が明けて空が少しずつ明るくなっていく様子を表します。

問3 「山ぎは (山際)」＝空のうち、山にすぐ接している**空の部分**。「山の端 (やまのは)」＝山のうち、空にすぐ接している**山の部分**。

境目をはさんで、**空側**を見ているのが「山ぎは」、**山側**を見ているのが「山の端」です。混同しやすいので、セットで覚えましょう。

問4 「あかり」＝「明るくなる・(空が)明らんでくる」という意味の動詞「あかる」の連用形です。

現代語の名詞「明かり (ライト・照明)」とはちがひ、ここでは夜明けの空がだんだん明るくなっていく様子を表しています。

問5 動詞の終止形…「紫だつ」／意味…「紫がかかる・紫めいた色になる」。

「～だつ」は「いかにも～らしくなる・～の感じを帯びる」という意味の接尾語的な動詞で、「紫だちたる雲」は「紫がかかった (紫めいた) 雲」となります。

問6 「たる」は**存续 (～ている)**の意味の助動詞「たり」の**連体形**です。直前の「たなびき」は動詞「たなびく」の連用形で、〔連用形+たり〕の形になっています。

問7 文末を「～たなびきたる」と連体形で止めて言い切らずに余韻を残すことで (連体止め＝体言止めに近いはたらき)、たなびく雲の情景がそのまま絵のように差し出され、読み手の心に静かな余情が残ります。春の段はあえて「をかし」などの言葉を置かず、情景だけで美しさを感じさせているのが特徴です。

問8 意味…「言うまでもない・もちろんだ」。

「月のころはさらなり」は、月の出ている明るい夜が美しいのは言うまでもないという意味です。そのうえで「闇もなほ (=暗い夜もやはり)」蛍が飛びかうのがよい、と続けます。「明るい夜のよさは当たり前。でも暗い夜だってよい」と、あえて闇夜のよさを取り上げている点に作者の見方が表れています。

問9 「なほ」＝「やはり・それでもやはり」。「はた」＝「これもまた・やはり」。

「闇もなほ」は「(月のない) 暗い夜もやはり (趣がある)」、「はたいふべきにあらざ」は「(それも) また言うまでもない」という意味です。

問10 「をかし」は、明るく知的に「趣がある・おもしろい・美しい」と感じる、理性的・客観的な美意識を表します。一方「あはれなり」は、心の底からじんとわき上がる「しみじみとした趣・しみりした情趣」を表します。

同じ「すばらしい」でも、「をかし」＝明るく感心する美、「あはれ」＝しみじみ心にしみる情趣、という違いがあります。枕草子は「をかし」の文学と呼ばれます。

---

問11 (例)「秋は夕暮れ(が趣深い)。夕日がさして山の端にたいそう近くなったところに、鳥が寝床へ帰ろうとして、三羽四羽、二羽三羽と飛び急ぐ、そのようすまでもがしみじみと趣がある。」

「さへ」＝「～までも」、「あはれなり」＝「しみじみと趣がある」をきちんと訳に入れるのがポイントです。

---

問12 「さへ」＝「～までも(添加)」。鳥が寝床へ帰る、その飛び急ぐ姿「までも」しみじみとよい、と程度を付け加えています。

「まいて」＝「まして・なおさら」。これは「まして」が音便化した形で、もとは「まして」です。鳥でさえあはれなのだから、雁の列なら「なおさら」よい、と前を受けて程度を強めています。

---

問13 訳…「たいそう趣がある・とても風情がある」。「いと」の意味…「たいそう・とても・非常に」。

「いと」は程度のはなはだしさを表す代表的な副詞で、「いとをかし」は「とても趣深い」というほめ言葉です。

---

問14 夕日がさすころ、鳥が寝床へ帰ろうと数羽ずつ飛び急ぐ姿に加え、雁などが列をつくって飛んでいくのが、とても小さく見えるようすを「いとをかし」と感じています。

身近な鳥の動きから、遠く小さく見える雁の列へと視線が移っていくところが見どころです。

---

問15 「つとめて」＝早朝(夜が明けてまもないころ)。

作者は、寒い冬の早朝に、火を急いでおこし、炭を持って廊下を渡っていく、そのきびきびした朝の情景を「いかにも冬らしくてふさわしい(つきづきし)」と感じているため、冬は「つとめて」がよいと述べています。

---

問16 活用形…連体形。意味…当然(～はずだ・～べきだ)。

「言ふべきにもあらず／いふべきにあらず」で「言うまでもない(わざわざ言うべきことでもない)」という意味になります。下に「に(助詞)＋あらず」が続くため、「べし」は連体形「べき」になっています。

---

問17 作者は、冬の早朝に寒さの中で火を急ぎおこし炭を運んでいく様子を、いかにも冬の朝らしくて「つきづきし(ふさわしい)」と感じています。反対に、昼になって寒さがゆるみ、火桶の火が白い灰ばかりになってしまった様子は、しまりがなくて「わろし(よくない)」と感じています。寒い朝のきびきびした情景＝○、ゆるんだ昼の情景＝×、という対比をとらえましょう。

---

問18 「つきづきし」＝「いかにもふさわしい・似つかわしい」。「わろし」＝「よくない・感心しない」(「悪し(あし)」ほど強くなく、「あまりよくない」程度の意味)。

---

問19 (例)「火桶の中の火も、白い灰ばかりが多くなって(しまつて)。」

「白き灰がちになりて」の「～がち」は「～が多くなる・～ばかりになる」の意味です。昼になって火が衰え、灰っぽくなってしまった、しまりのない様子を表しています。

---

問20 「飛びちがひ／たる」と分けられます。

・「飛びちがひ」…動詞「飛びちがふ」の連用形(蛍が入り乱れて飛ぶ意)。

・「たる」…存続の助動詞「たり」の連体形(～ている)。

あわせて「(蛍が)入り乱れて飛んでいる」となります。

---

問21 春…あけぼの（夜明け方）／夏…夜／秋…夕暮れ／冬…つとめて（早朝）。

「春はあけぼの。」「夏は夜。」「秋は夕暮れ。」「冬はつとめて。」と、各季節の冒頭で時間帯が示されています。

---

問22（例）作者は、だれもが美しいと思う場面だけでなく、ふつうは見過ごされがちな情景にも美を見いだしている点に特徴があります。たとえば夏では、月の明るい夜だけでなく「闇」の夜に飛ぶ蛍を、また「雨など降るもをかし」と雨の夜まで趣があるとしています。当たり前のようにとどまらず、自分の感覚で新しい美を見つけ出すまなざしが表れています。

※具体例は「闇に飛ぶ蛍」「雨の夜」「灰がちになった火＝わろし、と逆の例を挙げる」など、本文に即していれば可。

---

問23 作者…清少納言。時代…平安時代（平安時代中期）。ジャンル…随筆（見聞や感想を自由に書きつづった文章）。

---

問24 古典三大随筆…鴨長明『方丈記』・兼好法師（吉田兼好）『徒然草』（この二つと『枕草子』で三大随筆）。紫式部の長編物語…『源氏物語』。

※『枕草子』は日本最初の随筆とされます。三大随筆はセットでよく問われるので、作者名とあわせて覚えておくと得点源になります。

---